

今こそ「女性に対する暴力」について考えよう

毎年 11 月 16 日～29 日「女性に対する暴力をなくす運動」期間に寄せて

野坂祐子

「語られることのない」 女性に対する暴力

暴力や犯罪は、だれもが遭遇しうるできごとです。「日本は安全」「まさか、そんなことが」という根拠のない楽観視ができなくなったのは、社会情勢に対する漠然とした不安によるだけでなく、さまざまな被害者の声を聴く機会が増えたためでもあるでしょう。暴力や犯罪がもたらす衝撃の大きさは、とても言葉では言い表せないほどのものです。それでも当事者の声は、社会を動かしつつあります。犯罪被害者基本法（2004 年成立）から 10 年以上が経ち、被害者の置かれた状況は依然として困難であるものの、その存在すら認識されていなかった犯罪被害者の立場が知られるようになったのは大きな進展です。また、いじめのように、従来、子ども間のよくあるトラブルと捉えられていたものが犯罪として立件されるようになり、暴力の理解や介入の枠組みも見直されつつあります。

ところが、女性に対する暴力は、依然として語られることが少なく、男女間のトラブルとして矮小化されがちです。性暴力や性犯罪、ドメスティックバイオレンス（DV）、セクシュアルハラスメント、売買春（人身売買）などは、女性の心身を傷つけ、被害者の声を奪う行為です。被害者は、強い恐怖と無力感、恥辱感によって声を上げられないだけでなく、周囲からの「どうして抵抗しなかったのか」「なぜ別れなかったのか」「気にしすぎだ」という言葉によって、被害の事実すら認めてもらえず、口をつぐむしかなくなるのです。

このように、女性に対する暴力は、未だに十分認識されているとはいえません。しかし、今なお、女性に対する暴力は存在します。

女性に対する暴力とは

女性に対する暴力とは、性別に基づく暴力行為全般を指します。「女性に対して身体的、性的、若しくは心理的な危害又は苦痛となる行為、あるいはそう

なるおそれのある行為であり、さらにそのような行為の威嚇、強制もしくはいわれのない自由の剥奪をも含み、それらが公的生活で起こるか私生活で起こるかを問わない」と国連は定義しています。暴行したかどうか判断基準ではありません。不機嫌になってみせて女性を不安にさせたり、別れをほめかしたり、束縛を強めたりすることも、暴力にあたります。

加害者のみならず被害者も、「手を出したわけじゃない」「このくらいよくあること」と思いがちです。では、同じ行動を職場の上司や同僚男性にしたらどうなるでしょうか。社会人として許されないか、未熟とみなされるはずで、上司の前では我慢できることを、女性が相手ならかまわない、許されるという認識自体が、女性に対する暴力の土台になっています。

「女性も嫌がっていなかった」という言い分もよく聞きます。「その程度のことは笑って受け流すべきだ」と被害者を非難する人もいます。外から見れば、相手の言動は「その程度のこと」かもしれませぬ。ですが、相手のそんな言動への対応に、女性の将来がかかっていることが問題なのです。女性が笑ってやりすごさなければ、仕事を失ってしまうかもしれません。相手の「ちょっとしたしたこと」と女性の「将来」が同じ秤に乗っているのです。表情すら自由に出せない状況、これが国連の定義という「自由の剥奪」です。女性が自由に働けるというのは、就労しているかどうかではありません。こころが自由でない状況は、見えない監禁状態に置かれているに等しいのです。

インターネットを介した性暴力

近年目立つのが、スマホやインターネットを介した性暴力です。警察が検挙した児童ポルノに係る犯罪は、2013 年度には 1,000 件を超え、2009 年の約 2 倍に増えています。ストーカー事案の犯罪もここ 2 年間で 2 倍に急増しており、なかには殺人や傷害に至るものもあります。もちろん、これらは氷

山の一角に過ぎません。一瞬でもネット上に流出した画像は、回収不可能です。不安と不信、恥の気持ちにさいなまれる被害者もいます。子どもの無垢さを悪用した児童ポルノは、その子どもの将来にわたって悪影響をもたらします。

出会い系サイトを利用した犯行や交際中に共有した画像を悪用するリベンジポルノは、加害者による犯罪行為であるにも関わらず、メールや画像を「被害者が自ら送った」ことから、それを悪用した加害者よりも、「浅はかな行動をとった被害者」のほうが責められがちです。知らない人に会ったり裸の写真を送るなんて、あまりに無分別だと感じる人もいます。

しかし、多くの場合、ごくふつうのやりとりから始まって、次第に要求がエスカレートしていきます。「ちょっとだけなら」「二人だけの秘密なら」という好奇心や相手への恋愛感情を利用し、加害者は犯行に至ります。被害者が「こんなつもりじゃなかった」と感じたのなら、それは真の同意とは言えません。

子どものなかには、ネットで知り合った相手にレイプや売春を強制されても、そうした相手や居場所を求め続けてしまう子もいます。関心を向けてくれない家族よりも、画面の向こうで自分に関心（どんな関心であれ）を向けてくれる人のほうが、その子どもにとってはずっと身近な存在に感じられるからです。「自分のからだを大事にしてください」と非難される子どもは、しばしば「自



分のからだを大事にしてもらえなかった」体験を持っています。子どもたちに必要なのは叱責ではなく支援です。

ネット上の性犯罪を防ぐための教育や取組みも重要ですが、ネット上の「友だち」しかいない子どもとの関係づくりや過去の被害からの回復を支える援助、そして、女性の価値を「若さ」と「セックス」に置く社会の価値観も見直していく必要があります。

女性に対する暴力から、弱者に対する暴力へ

女性に対する暴力という概念は、単に「女性」を対象とした暴力を意味するのではなく、「女性の置かれた立場」が暴力の背景にあることを示しています。ですから、「女性に対する暴力があるなら、男性に対する暴力もあるだろう」と簡単に置き換えることはできません。社会的な立場や権力において、女性と男性は一概に対等とはいえないからです。男女に課せられるジェンダー規範も異なります。「女性も男性も、みんな大変なんだ」と一括りで捉えてしまうと、こうした本質が見えなくなってしまいます。

もちろん、個々にはあらゆる人が暴

力を受けています。そうした現実を理解する際、女性に対する暴力を捉える「視点」が役立ちます。例えば、職場組織において、男性が疎外され、パワハラやモラハラの被害を受けている場合、弱い立場に置かれた男性への暴力が、「あいつは男としてダメだ」「男なら耐えろ」というジェンダー規範によって正当化されているかもしれせん。このように、女性に対する暴力の概念で重視されている立場や権力、ジェンダーの視点を取り込むことで、男性に対する暴力の本質もみえやすくなります。暴力は、個人の至らなさによって生じるものではないのです。

今後、さらに多様なセクシュアリティや障がいのある人に対する暴力にも取り組んでいくべきです。女性といっても、同性を恋愛対象とするレズビアン、身体的性別とは異なる性自認（自分は女／男であるというアイデンティティ）を持つ人（性別違和）やトランスジェンダー（異なるジェンダーを生きる人）など、さまざまです。しかし、同性パートナーからDVを受けても「DV」とみなされず保護されない、トランスジェンダーの女性がシェルターに入所できないといったケースもあります。セクシュアルマイノリティである

被害者は、周囲の無理解や偏見によってさらに二次被害を受けやすい存在です。ときに、支援者も不適切な対応をしてしまうこともあります。

障がいや民族性などによって、より弱い立場に置かれている人もいます。情報が届かず、配慮が不十分なこともあります。女性に対する暴力に取り組むなかで蓄積してきた知恵や経験を、これからもっと広げていきましょう。貧困や差別、紛争や葛藤など問題が山積する今こそ、「女性に対する暴力」の視点からみえてくるものがあるはずです。暴力をなくすには、まずは暴力を見据える視点が不可欠です。

野坂祐子 (のさか さちこ)

大阪大学大学院人間科学研究科教員

<プロフィール>

大阪大学大学院人間科学研究科准教授・臨床心理士。主な研究テーマは、性暴力や虐待などのトラウマによる影響と回復。犯罪被害者支援に携わる。編著『子どもへの性暴力』（2013年）、共訳『あなたに伝えたいこと：性的虐待・性被害からの回復のために』（2015年）。子どもの性の健康研究会ホームページ（<http://csh-lab.com/>）にて支援用資料掲載。

データで見る

すてっぷ相談室

DVに注目して相談結果を見てみると

すてっぷ相談室では、女性のために電話相談・面接相談・7つの専門相談を設けています。

2014年度の相談件数計は1,877件、その内訳は1位「パートナー」、2位「こころ/状態」、3位「暴力」という結果でした。DVに関する相談は「暴力」として集計しており、「暴力」の中の9割をDVが占めました。これは、DVが一定の割合を占める問題であることを示しています。

相談内容は複数に渡ることも多々あり、例えば「パートナー」との関係についての相談の中にDVが潜んでいることも多くあります。DVを長期に渡って受け続けることにより、こころの状態に大きな影響を及ぼします。身体的暴力だけではなく、精神的・社会的・経済的・性的・子どもを利用した暴力も、自分への評価を低下させたり、自分がどうしたいのかわからなくしてしまうこともあります。

相談室では、相談を継続するなかで自分の考えや気持ちを意識化し、問題解決のために自ら行動していけるようサポートをしています。

